

平成 21 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17401023
 研究課題名(和文) 中央アジア(タジキスタン)における仏教と異思想の交渉に関する調査・研究
 研究課題名(英文) Investigation in connection between Buddhism and other ideas in Central Asia (Tajikistan)
 研究代表者
 蓮池 利隆 (HASUIKE TOSHITAKA)
 龍谷大学・仏教文化研究所・客員研究員
 研究者番号：50330022

研究成果の概要：タジキスタンの遺跡発掘調査を通して仏教とゾロアスター教習俗との交渉を検証した。仏教寺院遺構の存在が確認されている遺跡において、ゾロアスター教の方形拝殿(チャルタク)遺構を検出し、その付属工房から仏像の表現形式をもったゾロアスター教神像(ミトラ神)を発見した。これによって、イスラーム化以前の中央アジアではゾロアスター教が強い影響力を持ち、仏教との重層信仰が存在していたことを明らかにすることができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	3,700,000	0	3,700,000
2006年度	2,700,000	0	2,700,000
2007年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2008年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
総計	10,800,000	1,320,000	12,120,000

研究分野：人文学A

科研費の分科・細目：東洋史

キーワード：初期浄土教、ゾロアスター教、方形仏堂、チャルタク、ミフル神、重層信仰、タジキスタン

1. 研究開始当初の背景

この地域の調査は、1970年代前後、旧ソ連邦の主導のもとで実施されてきた。しかし、旧ソ連邦の崩壊後、中央アジア諸国の独立などにもともなう内政不安定の時期が続いた。特にタジキスタンにおいて1990年代は内戦状態の時期にあった。漸く、近年の内政安定化によって、それまで中断されていた仏教遺跡の調査が再開され、世界的に注目を集めつつある。中央アジアにおける日本人研究者が関わる発掘は、加藤九祚氏によるウズベキスタン調査、東京文化研究所によるアフガニスタン調査を挙げることができる。また、東京文化研究所はユネスコと提携してタジキスタン・アジナテバ遺跡の保存修復事業を展

開してきた。このような状況下、当研究ではパミール南部の調査や数ヶ所の現地調査を重ねた上で、城砦遺跡であるカレ・コファルニホン遺跡発掘調査に着手することとなった。

2. 研究の目的

中世以前の中央アジア(タジキスタン)において、仏教とゾロアスター教との交渉を証明する遺物を発掘し、その研究を通して初期浄土教・阿弥陀仏信仰成立の経緯を検証することがこの研究の目的である。

(1) 第一の課題は、方形仏堂の伝播ルートの検証である。日本に伝来した常行三昧堂は方形のプランを持つ。研究代表者がこれまでに実施し

た調査の中、西域南道の仏堂にも方形プランが見られることを確認している。そして、隣接する西トルキスタンの中、タジキスタンにも方形仏堂が遺されているとの情報を得た。加藤九祚『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』(シルクロード学 研究第四巻 一九九七年)には、旧ソ連邦の主導の下で実施された発掘調査において、カレ・コファルニホン遺跡とクヒール・カラ遺跡に方形仏堂があったことが報告されている。この方形仏堂がどのような宗教的背景の中で建立されたのかを考察する。仏教と異思想が交渉の中で、初期浄土教が成立したとする仮説を立証することが可能となる。

(2) 現在のタジキスタンにおける宗教事情を調査し、独自のイスラーム信仰の歴史的背景を考察する。中央アジアのイスラームは穏健派とも言われており、独特の習俗をもっている。それはソグド、あるいはトハラの人々がかつて信仰していたゾロアスター教の伝統によるものと考えられる。タジキスタン南部のパミール地域にはそのような習俗が多く残されている。現地調査をとおして、具体的な習俗について考察を進める。

(3) タジキスタン国立博物館の収蔵品を調査し、中央アジアの考古資料と諸宗教との関連を考察する。この調査は実際の発掘調査において得られる遺物の研究・照会にとって不可欠なものである。

3. 研究の方法

当初は日本国内でのタジキスタン入国ヴィザ取得ができなかったため、ウズベキスタンに入国してタジキスタン領事館でヴィザを申請・取得後、タジキスタンに入国しなければならなかった。ウズベキスタンからタジキスタンへの経路は初年度ではホジャンドからドシャンベまでのタジキスタン航空国内線を利用した。しかし、在タジキスタン日本大使館からの指示により、次年度からはサマルカンドからタジキスタン西部のサリアシアへ入国する陸路を取るようになった。航空路の安全が保証できないという理由であった。

しかし、2008年度の調査からは入国ヴィザが日本で取得可能となったため、タジキスタンへの往復経路はトルコ航空を用いるようになった。航空運賃は27万円であった。今の時点ではこの経路が最も便利だと思われる。

タジキスタンにおいては、ドシャンベ市内で食料品・飲料水や備品を購入後、都城址のあるエサンボイ村へ80kmを陸路で移動する。現場での宿泊は民家を借りあげ、料理人を雇って調理にあたらせた。具体的年度の実施状況は以下のようである。

初年度の2005年は発掘調査を実施するための予備調査及び地下レーダーの研修・トレーニングを実施。

2006年度は地下レーダーと解析ソフトによる電磁波探査を実施。

2007年度には2カ所です掘溝による予備発掘

調査を実施。

最終年度の2008年は試掘溝を拡張する形で本格発掘調査を実施した。

タジキスタン側(国立博物館)のサイドムロド館長によれば、遺跡の規模から見て数年の調査年数を要するということである。

4. 研究成果

研究の方法で示したように、年度をおって調査目標が進展している。以下、その年次にしたがって調査によって得られた成果を挙げていく。(1) 2005年の予備調査としてタジキスタン国内の仏教関連遺跡を視察した。夏季に実施したパミール地域の踏査ではイシュカシム地方の習俗についての知見を得ることができた。



ソングのイスラーム聖人霊廟

ワハン回廊にあるソングのイスラーム聖人霊廟には入口の屋根に山羊の頭部が飾られていた。廟内には三つの聖火炉と山羊の角が奉納されていた。これはゾロアスター教の太陽神であるミフル神信仰と関わるものである。

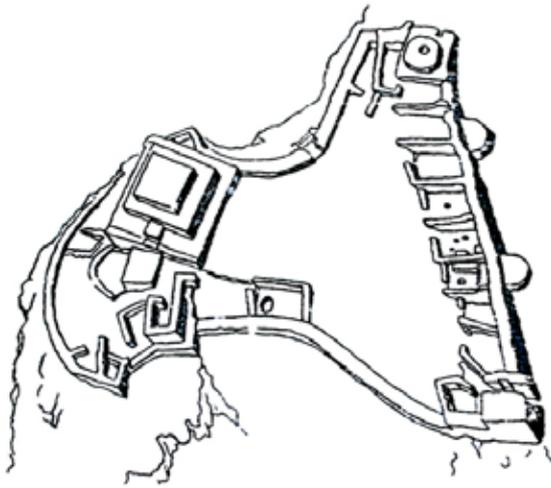


廟内の三聖火炉と奉納された山羊の角

この地域では、山羊が太陽神ミフルの使いと考えられており、また三つの聖火はゾロアスター教が拝火教と呼ばれる所以でもある。それら三つの火は「王の火」「祭官の火」「庶民の火」と呼ばれ、複数個所でこの聖火炉を確認することができた。

この地域における習俗は七世紀に書かれた玄奘『大唐西域記』にも記述があり、仏教との交渉があったことが推測される。第十二巻に出る達磨悉鉄帝(ダルマステイ)国の記述には病氣平癒のための習俗信仰が存在したこと、またその地の王によって習俗信仰が廃せられ、仏教僧院が建立されたとある。

ヴラングの僧院址は玄奘の記述を裏付けるものと言える。ただし、記述された僧院そのものであるかは、今後の研究を待たねばならない。ヴラング僧院址はワハン街道を見下ろす丘の上にある。



ヴラング遺跡俯瞰図

タジキスタン国立博物館には上記ミフル神の木像が展示されている。タジキスタン北部のアイニン地区で発見された神像は裸像ではあるが、衣装や装飾具を着けて礼拝されていたものと考えられている。



ミフル神木造と聖杖頭部
タジキスタン国立博物館蔵

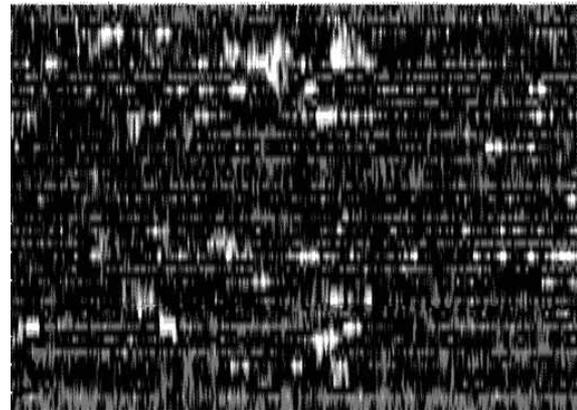
左手には聖火炉を乗せ、右手には聖杖を持つ。聖杖の頭部には山羊の頭が三つ表現されており、三つの聖火を象徴する。初年度の調査によって、イスラム化前の中央アジアにゾロアスター教が大きな影響力をもっていたことが明らかとなった。この地を経て中国へ伝えられた仏教も、当然そのような宗教的背景の中で伝播したのである。

(2) 2006 年度には地下レーダー・SAR3000 によ

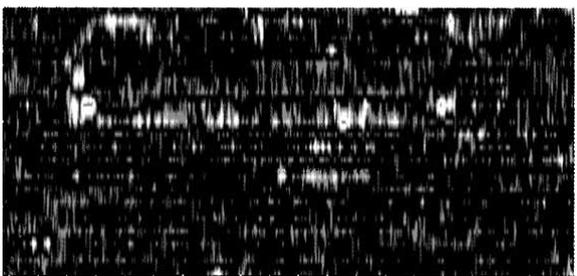
る電磁波探査を実施した。都城内の十カ所を任意に選択し、十数メートル四方の範囲で探査した。現場はドシャンベから南西 80 キロメートルにあるエサンボイ村である。



探査の結果、2カ所で大きな反応があり、連続する遺構の影を確認することができた。以下に地表から3メートル程の深さのスライス画面を挙げる。まず、KKF04 と編番したエリアでは、



次に KKF08 と編番したエリアでは、

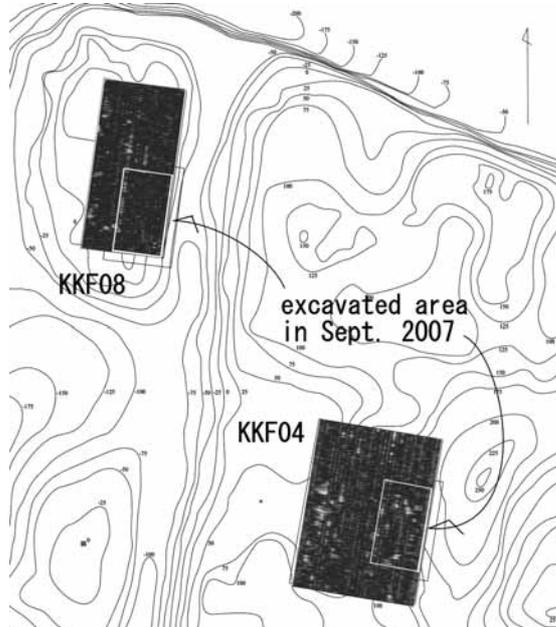


以上の二ヶ所では、白い影の部分が連続して現われており、遺構の構造物であると考えられた。ただし、日干し煉瓦の壁は堆積土との区別が困難だという意見もあり、礎石部分の可能性も否定できない。

この年度の調査は機材のレンタル期限もあって、現地では 10 日間の滞在であった。しかし、地下レーダーと解析ソフトを使っでの探査により、試掘調査の候補地を絞り込むことができた。従来のように経験と勘に頼るのではなく、科学的データに基づいて選定ができたことは、効果的な発掘作業を行うための最良の方法であったと考

えている。

(3) 2007 年度には試掘溝を掘り、遺構の確認を行った。また、平板測量の機材を持ち込み、龍谷大学大学院生2名(小川えりか・北善孝)の協力を得て、遺跡の平面図を作成した。平面図部分と試掘溝の位置を以下に示す。



白線で示したエリアがそれぞれの試掘溝である。探查結果をはめ込んで表示している。

調査は試掘作業と地形図・遺跡図作成を並行して実施した。タジキスタン側研究者の6人は主に発掘作業をおこない、日本側からは研究協力者である小野田豪介が記録・写真を撮りながら現場に立ち会った。蓮池と大学院生2名は発掘現場周辺の地形図を作成するため、平板とレベルでコンタ図化作業を行い、発掘現場からの要請があれば試掘現場の図化を行った。最終的には時間が足りず、試掘現場である KKF04 と KKF08 を中心とした範囲を図化することどまった。1970 年代に発掘が行われた範囲との関連を知るために、旧発掘範囲では一部の遺構外形と部分的にレベルを計測した。

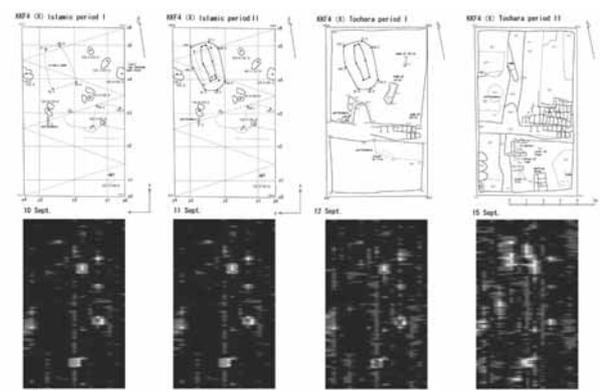


作成した地形図を衛星写真と重ね合わせてみると6.5度の偏角があることがわかった。これは衛星写真が真北で提供されていると想定しての値である。

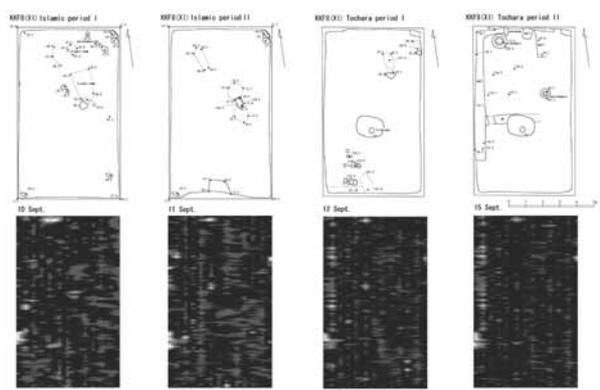
試掘は KKF04、08 において、6m × 10m の範囲で実施し、それぞれにおいて4回ほど文化層にしたがって図化をおこなった。第一層についての2回はイスラーム期のものであり、第二層に

ついての2回はトカラ(トハラ)期のもので7世紀から8世紀に属すると考えられる。

この試掘の目的の一つに、地下レーダーのデータ検証があった。先に試掘の進展に伴う平面図と対応するスライス画像を挙げ、次に該当部分のスライス画像を地表0mから2.5mまでを連続して表示している。

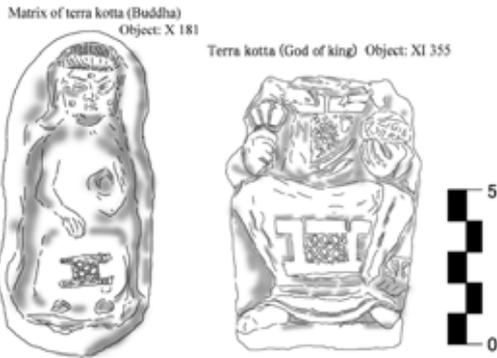


上図、KKF04 では北西のイスラーム期墓の墓石がまず現れている。最終図面(トハラ期2)中央の-47.4レベルの上部からは陶器片が多数出土したが、オレンジ色となって現れている。このように KKF04 では多くの部分で影が現れており、それはこの部屋が工房址であったこととも関わっているように思われる。



KKF08 では西側の壁跡が明瞭に映っているのが確認できる。次の図では、2007年9月に試掘した範囲を白線で示している。KKF04 では、白線の枠から西側にオレンジや緑で反応が現れている。KKF08 では、白線枠の西端から北へ向けてオレンジの断続的の反応が現れている。(図ではモノクロ印刷)

KKF04 では、幅70cmの壁によって構成された工房址を確認した。KKF04 が工房址であることは、炉跡や作業台、さらには完型の壺と杯や灯明の油皿が出土したことも明らかである。その遺構中、部屋 No.4(作業場跡)の炉跡の南、床面より10~20cm上の位置(地表から約1.3mの深さ)でテラコッタを作るための型(遺物番号: X-181)が発見された。肩間に描かれた白毫(びやくごう)相と二段に描かれた頂髻(ちょうきつ)相は三十二相の中の二つで、仏陀像の特徴をよく示している。



高さ10cm前後の小さな遺物ではあるが、その仏教学的意義は大きい。カレ・コファルニホン遺跡はアジナテバ僧院のように出家者たちが住んだ特別なものではなく、一般の人々が世俗的生活を営んだ城郭遺跡である。そこには世俗の人々によって信仰された大乘仏教の性格を認めることができる。

また、KKF08(XI)の第二層からは「神々の王の像」(遺物番号: XI-355)が発見された。発掘現場の北西隅、地表面から約240cmと深く、大きな甕のさらに下から出土している。これも9.0×5.0cmと小さな遺物である。頭部を欠くものの、細部はしっかりと描かれている。像は王座に坐っており、左手にはマジマル(小型の拝火壇)を持ち、右手には何かを握っている。胸部には格子状に鎖帷子が描かれている。その姿は先述のタジキスタン国立博物館蔵のミフル(ミトラ)木像と一致する。ミフル木像は5～6世紀頃のもので、トカラ時代のもと考えられている。このことから、右手の物は先端が三つに分かれた聖杖であると推測できる。王座に坐る神、あるいは武装した神としてミフル神の例が知られており、当時の人々に広く崇拝されていた。

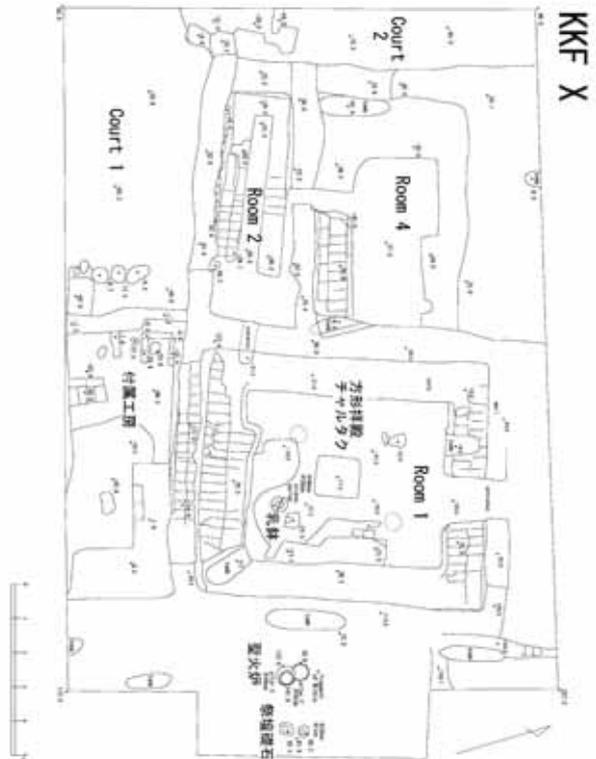
先の仏陀像型とミフル神像に共通する図柄として足もとに描かれた拝火壇がある。ミフル神と拝火壇の組み合わせはよく見られるものであるが、仏陀像型に描かれた拝火壇は実に興味深いものである。仏陀は明らかに左手を拝火壇に差し伸べている。また、右手はマジマルを持っているようにも見える。

拝火壇に手を差し伸べる姿勢はクシャーン朝の歴代王を描いたコインにも見ることができる。すなわち、この仏陀像型には仏教とゾロアスター教の習合が示されているのである。同じトカラ時代に属し、地域的にも近いウズベキスタンのカラ・テバ遺跡の仏像銘文にはブッダ・オルムズドとあることも報告されている。

この地域では、ミフル神と最高神オルムズド(アフラ・マズダ)は同一視されることが多く、いずれもゾロアスター教の重要な神である。いわば、KKF04出土の仏像はミフル仏陀と命名可能な象徴的意味を持つ。

(4) 2008年度発掘調査 前年度9月にカレ・コファルニホンX(KKF-04)、XI(KKF-08)の2ヶ所で

試掘を実施し、両エリアで壁の存在が確認されていた。タジキスタン側の編番により遺跡XとVIの名称に変更。この年度の発掘調査では昨年出土した壁を追う形でエリアを拡大しながら調査を進めた。その結果、Xエリアでは壁の礎石に二～三段の石組みを、またXIエリアでも石組みの壁が確認された。

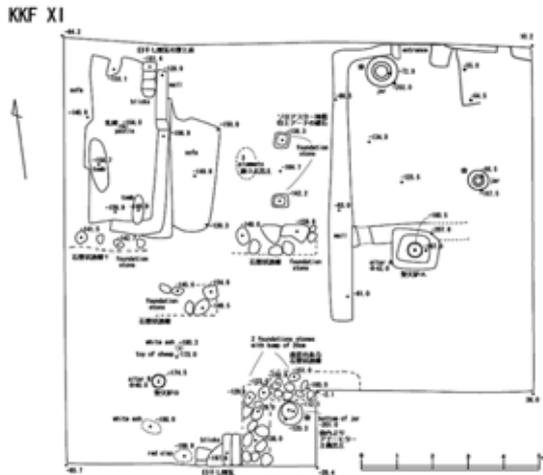


エリアXで特徴的な遺構は部屋-1で、東西レンガ壁の北東側に位置する。周囲をソファール遺構が囲んでいる。これらのソファールはレンガによって構成され、レンガの規格は、東西壁と同一の40×26cmのものである。ソファール上部と床面の高さは約50cmである。北西と南東の対角線上に炭化した木材が発見されている。北東の隅でも木炭の塊が出土している。また、昨年の発掘の際にも、対角線上の南西隅で多くの木炭が出土していた。これらは4本の柱あるいは礎盤が焼けたものと考えられる。部屋の中央には正方形の壇の跡が認められた。この建築様式はベンジケントで確認されているチャルタク(方形拝殿)と一致する。

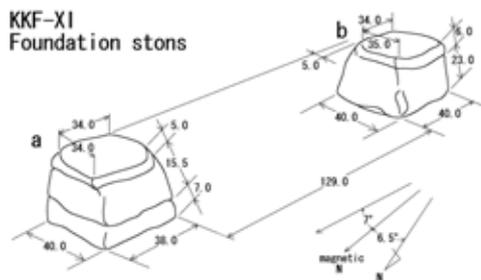
南東の礎盤近くでは直径40cm(内径28cm)の乳鉢が検出された。この乳鉢はゾロアスター教の儀礼で重要な意味をもつハーオマを搾るためのものと考えられる。また、東側の壁面近くには新旧の聖火炉が出土している。



これらの遺物と遺構の構造から、ゾロアスター教の方形拝殿であったことが明らかとなった。またエリア XI においてもゾロアスター教の拝火壇遺構が検出されている。



中央の一对の礎石はアーチ状構造を支える柱の基礎となるもので、拝火壇施設の典型である。



また、周辺の石畳状構造物はバルコニー風の建物(アイワン)の礎石である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

- 蓮池利隆、「常行堂の守護神・摩多羅神」、仏教学研究(龍谷仏教学会)65号、pp.78-104、平成21年(2009)、査読有
- 蓮池利隆、「観貨邏弥陀山と百万塔」、仏教学研究(龍谷仏教学会)64号、pp.1-18、平成20年(2008)、査読有
- 岡田至弘、「A Question Answer System Based on Confirmed Knowledge Acquired from a Mailing List」、Internet Research, Vol.18, No.2, pp.165-176、平成20年(2008) 査読有
- 蓮池利隆、「阿弥陀と弥陀」、中央仏教学院紀要, 18号、pp.35-51、平成19年(2007)、査読無

岡田至弘、「3次元形状データの構造解析に基づく部分形状表現」、電子情報通信学会論文誌, Vol.90, No.2, pp.157-164、平成19年(2007)、査読有、佐野東生、「A Field Note on the Shi'ite World from Central Asia to Turkey」、龍谷大学国際文化研究ジャーナル、第9号、平成17年(2005)、査読無

[図書](計1件)

蓮池利隆編、大学生協京都事業連合ブックプリントセンター、「ミトラ仏と観貨邏の仏教」、平成21年(2009)、134頁

[その他]

研究関連ホームページ

「蓮池利隆のページ」タジキスタン調査報告

http://homepage3.nifty.com/T_Hasuike

「タジキスタン国立博物館」

<http://www.afc.ryukoku.ac.jp/tj>

6. 研究組織

(1)研究代表者

蓮池 利隆 (HASUIKE TOSHITAKA)

龍谷大学・仏教文化研究所・客員研究員
研究者番号：50330022

(2)研究分担者

岡田 至弘 (OKADA YOSHIHIRO)

龍谷大学・理工学部・教授
研究者番号：30127063

佐野 東生 (SANO TOSEI)

龍谷大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：60351334

(3)研究協力者

吉崎 伸 (YOSHIKAZI SHIN)

財団法人京都市埋蔵物研究所・係長

小野田 豪介 (ONODA GOSUKE)

檀王法林寺・研究員

ボボムロエフ・サイドムロド

(BOBOMULLOEV SAIDMURD)

タジキスタン国立博物館・館長